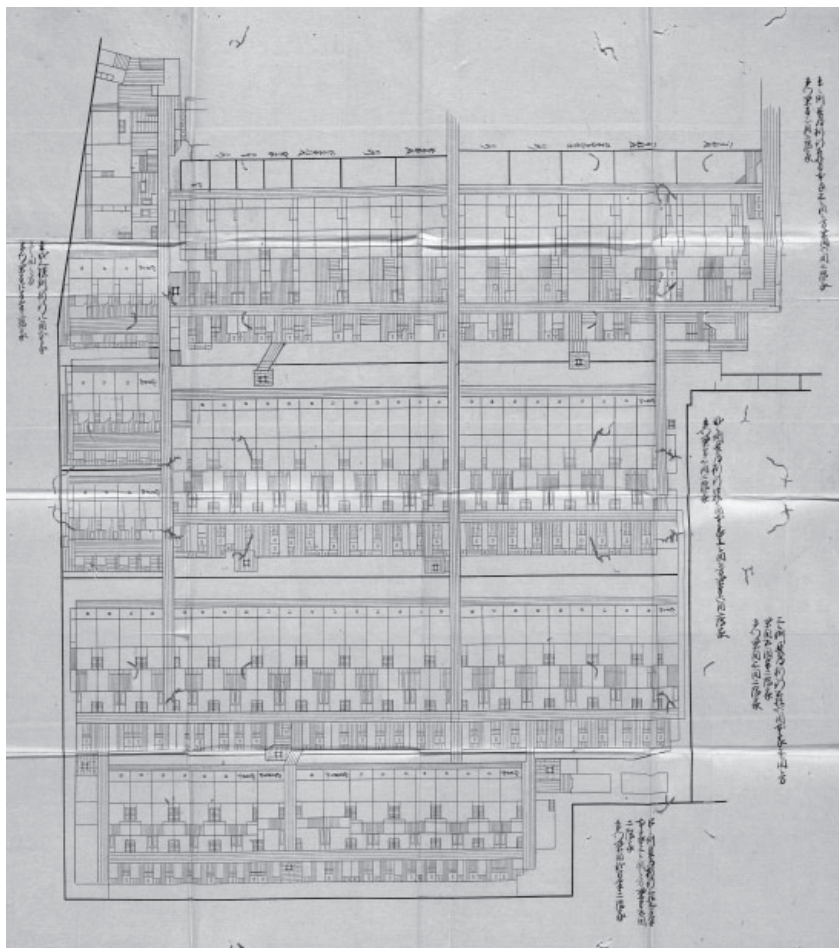


国立歴史民俗博物館の愉悦⑪

# 御本丸一三四之側大奥長局惣絵図 鈴木扣

棟梁鈴木家資料 万延元年（1860）



国立歴史民俗博物館が所蔵する資料群の一つに、徳川幕府小普請方支配御屋根方棟梁を務めた鈴木家に関する資料がある。幕府の建築工事は、主に表向を管轄した作事方と、奥向を管轄した小普請方の二役所によって行われた。作事方、特にその頂点にいた大棟梁・甲良家のものが多く伝来し広く知られているなかで、小普請方かつ現場を取り仕切った御屋根方棟梁鈴木家の資料群は、幕府職制や具体的職務を解明する上でも貴重といえよう。

江戸城本丸御殿の構造は大きく、男性が政治を行う表向と、当主の居住空間である奥向に分かれ、さらに奥向は当主・男性役人からなる表方（中奥）と、正妻である御台所を中心に家族・女中からなる奥方（大奥）という男女の性差に対応した二つの領域に

わかれていた。

表向・奥向表方と奥向奥方は別棟で建てられ、江戸時代初期には石垣、中期以降は土手と銅堀で仕切られていたという。そして、將軍ほかごく限られた人物のみが御鈴廊下を通り、双方を往き来できたのである。また、表向と奥向表方との間にも二カ所の錠口があり、男性役人であっても往き来することはできず、面談する場合は錠口の敷居の内と外に座って行う必要があった。

大奥（奥向奥方）はまた、男性役人の事務空間である広敷向（広敷門より出入り）、將軍および御台所の居住空間である御殿向、奥女中の居住空間である長局向で構成される。

写真の絵図面は、江戸城本丸大奥の長局の平面図である。作成年代は記されていないが、他資料との比定により、万延元年（一八六〇）の建て替え時のものと判明した。

長局の構造について絵図面をみると、横長の棟が四列並んでいるのがわかる。上から一之側、二之側、三之側、四之側である。中央を貫く通路の先（絵図面上部）は大奥の御殿向へとつながっている。また、一・二之側の左側に通路を挟んでやや独立して存在する四つの棟は、上から半下部屋、一之横側、二之横側、三之横側である。

長局は、総二階の複数の棟を連結して建てられ、奥女中のランクによって与えられる部屋の規模も異なる。一之側の間口をみると、六間（約一m）、五間、四間半、三間、二間半の部屋があり、二之側以降はそれに比して狭小なのがわかる。同時期の十四代將軍徳川家茂を事例に奥女中数をみると、家茂付が一三二名、御台所和宮付が六七名、そのほか天璋院・本寿院・実成院付が合計一八六名おり、総計で三八五名にものぼった。

長局は奥向の最も奥に位置し、わずかに狭い外庭があるだけで、堀の中に閉ざされた空間であった。そのため、地震や火災などの災害時には、被災するリスクも高く、女中たちは常に命の危険にさらされていたのである。